

# 先人の知恵から

## 23

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今年も又4回にわたって、先人の知恵を伝えていこうと思っている。

今回は「く」行からである。但し後の方で、「君子」で始まる諺が結構多い。「君子」は一般的ではないので、入れるかどうか迷ったが、二つばかり入れてみた。「君子」でさえもというところで受けてもらえればと思う。そして、「け」行からと合わせて次の七つをご紹介します。

- 君子は豹<sup>ひょう</sup>変<sup>へん</sup>す
- 君子は和して同せず、  
小人は同じて和せず
- 形影<sup>けいえい</sup>相同じ
- 鶏<sup>けい</sup>口<sup>こう</sup>となるも牛<sup>ぎゅう</sup>後<sup>ご</sup>となる勿<sup>な</sup>れ
- 稽古<sup>きんこ</sup>に神<sup>じん</sup>変<sup>へん</sup>あり
- 蛩<sup>せつ</sup>雪
- 兄<sup>けい</sup>弟<sup>てい</sup>牆<sup>が</sup>に鬨<sup>せめ</sup>げども、  
外<sup>あ</sup>そのあなどりを禦<sup>お</sup>ぐ

### ＜君子は豹変す＞

①君子は、過ちと知ったらすぐにさっぱりと改めるといふことのとえ。② 自分に都合が悪くなると、それまでの考え方や態度を一変させることのとえ。出典 易経

この諺には二つのイメージを持っていると思う。①の方は、潔さ、②の方は潔いというより狡いイメージがある。人の上に立つものは、狡いよりは潔いのが良い事は言うまでもない。

上の者が、あまり態度をコロコロ変えられては、下につくものとしては大変困るが、態度をかえるとしても、責任を持って、その後の営みに臨むのであればそれはそれでよいかもしれない。最近テレビ等に出てきて、頭を下げている人たちは、①であってほしいと思うが、その様に見えない。むしろ、またやるのではという懸念を我々に残す。「あ～ばれちゃったの。すみませんでし

た。今後気をつけます。」という軽い感じに受け取れてしまう。これは筆者だけのうがった受け止め方なのだろうか？

日本人は、誠実で正直で、真面目なことが世界でも認められていたから、製品の信頼度なども高かった。しかし、最近、杜撰さが目立つようになり、信頼度も落ちてきているように感じる。

物事にこだわるのは、大事なことでもあるが、間違っているとわかったら、直ぐに修正できることは、勇気もいるし、日本人の特性でもある、真面目さ、誠実さにも通じる潔さだと思う。そういう心意気を、これからの子どもたちも持ってほしいとの願いと、未来の日本人が再び、世界から誠実で正直で真面目な人間であると思われるようになってほしいと思い、この諺をあげた。

英語では…

A wise man changes his mind, a fool never. (賢者は考えを変えるが、愚者は決して変えない。)

＜君子は和して同ぜず、

小人は同して和せず＞

君子は人と調和するが、主体性を失うこととはない。小人は付和雷同するが、人と調和することはないということ。略して「和して同ぜず」ともいう。 出典 論語

人と調和することと、同ずることは同じではない。「調和」とは、物事の間釣り合いが取れていること、互いに和合している

ことという意味(大辞林)である。一方「同ずる」は、同意する、賛成する、くみするというような意味である。調和するのは、互いに対等の立場で認め合うもので、自分の主体性はそのままであるが、同ずる方はどちらかという、自分の主体性はなく、周りに合わせるだけの意味合いになる。「付和雷同」は自分にしっかりした考えがなく、他人の意見にすぐ同調することである。

子どもも大人も、中々自分の主張をせず、周りに合わせることばかりしている。自己主張をすることにも、やりすぎはマイナスにしかならないが、間違っていたり、納得できないことに対して、「No」を言える力は育てたいものだ。上に立つものばかりではなく、日々の生活の中でも、例え目上の人や親に対してでも、間違いをただすためには、物が言える社会を構築していかねばならないのではと思う。

一方で、自閉症スペクトラム障害のお子さんには、正しいことを正しいと主張する力を持っているが、それ故に、周囲と和することが出来ないこともある。この矛盾をどう説明しても、中々理解できない。世の中というものは、程々の正しいことと、程々のいい加減さで出来ているからでもある。

子どもたちに、正しいことを伝え、正義や真実を伝えるには、自らの言動を見直して、お手本を示すことが大切だろう。そういう意味でも、長いものに巻かれることばかりではなく、時にはしっかりと主張する姿を見せることも必要になる。

### <形影相同じ>

人の行動の善し悪しは、その人の心の善し悪しによるという例え。形と影とは同じで、形がゆがんでいれば影もゆがむということから。 出典 列子

心の状態は、様々なところに影響を及ぼす。心が落ち着いていれば、行動も落ち着く。慌てていると失敗が多くなるのがそのよい例だろう。心を正しく、しっかりと保つことで、自分の行動も正しく保てる。子どもたちや保護者に、この諺を伝える時には、子どもたちや保護者自身の言動の様子から、本当のことが見えてしまうという意味で伝えている。

### <鶏口となるも牛後となる勿れ>

大きな集団で人の尻についているよりも、小さな集団でもその頭となるほうがよいということのたとえ。略して「鶏口牛後」ともいう。 出典 史記

この諺を最も多く使うのは、進路の話をする時である。保護者は、ちょっとでも高いレベルの学校に子どもを入れたがる。それはそれでわからない話ではない。良い学校にいれ、良い大学に進学し、良い会社に入って、良い人生を送る。そんなことを考えている。それも少し前までは、当たり前のことだったかもしれない。しかし、バブル崩壊後、大会社もつぶれるようになり、寄らば大樹の神話が崩れた。以来、もっと自分がやりたいこと、学びたいものへとシフトしてきた。それでも相変わらず、良い

学校に入れたい保護者は多い。

ギリギリでレベルの高い学校に入っても、伸びしろのある子どもであるなら問題ないが、小学校から勉強ばかり、中学校も勉強ばかり続けてきた子の場合は、伸びしろがあまりないことが多い。また、塾等で、試験対策を学び、本質理解がないまま受かった場合もあとがしんどくなるのではないか。結局レベルの高い学校に入ったは良いが、ついて行けず、挫折を味わい、希望も失って不登校になる子どもたちも見てきた。

能力の高い子と言うのは、余り勉強をガツガツしなくても、そこそこの成績を取ってしまうものである。そんな子たちと競争しても勝ち目はないと思うなら、一つランクを落としても、少しゆとりをもって学校生活を送れたほうがずっと学びが多い。自己評価を下げてしまうと、力を発揮できないだけでなく、鬱になったり、引きこもってしまったりという問題にもなりかねない。より良い学校生活をおくり、自信をもって次のステップに行ける方が、子どもたちのためになることもある。もちろんギリギリで頑張る方が力を出せる子もいるだろう。その見極めも大事である。それも含め、子どもたちや保護者にこの諺を伝えている。

英語では…

Better be first in a village than second at Rome. (ローマの二位より村の一位につく方が良い。)

### <稽古に神変あり>

熱心に修練を続けていれば、自分の能力

以上の高いところに到達するものであるということ。神変は人知では測りえない変化。

昔、ピアノを習っていたが、練習は殊の外面倒で、継続性がなかった。結果趣味の域を出なかった。自分の子どもにも楽器を習わせていたが、練習を毎日させるのは中々大変だった。もし一生懸命頑張って、練習させていたら、もっと上手になっていたかもしれない。演奏家にするなら、子ども自身が楽しく練習できることと、保護者側の努力が必要である。

武道でも、スポーツでも、しっかりした成績を出している人たちは、それぞれ並々ならぬ努力を続けている。その結果としての良い成績だろう。

先日女子柔道の選手が引退のインタビューを受けていたが、その席で、「選手でいない事、練習をしなくてよいことがこんなに楽だとは思わなかった」と言っていた。厳しい練習を続けるには、強い意志も必要である。羽生結弦選手が、滑った後に氷の上で大の字になっているのを見たとき、精根尽き果てた状態なのだろうと皆が思っただろう。神の領域等、色々言われたが、偉業を成し遂げるには、やはりそれだけの努力が必要なのだ。

部活動や、お稽古事で躓いている子どもたちやその保護者たちの励みになればと、この諺を伝えることがある。

#### <蛍雪>

貧困に耐え、苦勞して學問に励むこと苦學すること。 出典 晋書・蒙求

「蛍の光窓の雪〜♪」誰もが知っているのではというほど有名な歌であるが、この諺から作られたと言われている。今時電気もない家で暮らしている人は殆どいないだろう。明るい電気のもとで、寒くもなく暑くもなく、適温で勉強などをしている子が殆どである。灯りがないのでろうそくの火を灯し、寒さで凍える手に息を吹きかけたり、手をこすり合わせたりしながら、ちびた鉛筆でミカン箱を机代わりに勉強を続ける姿。そんな姿を見ることはなくなった。世の中は豊かになった。それでも貧困にあえいでいる人はまだいる。豊かに守られている子どもたちよりも、貧困の中で必死に学んでいる子どもたちの方が、目的意識を以て勉強に励んでいるかもしれない。「蛍の光〜」を歌うとき、今の自分が恵まれていることに感謝する心も忘れずに歌えたら良いなと思い、この諺を取り上げてみた。

英語では…

It smells of the lamp. (ランプのにおいがする。)

蛍の光の歌の原曲は Auld lang syne というスコットランドの民謡。

#### <兄弟牆に闢げども、

#### 外そのあなどりを禦ぐ>

兄弟は、普段は家の中で喧嘩ばかりしていても、外から侮辱を受ければ、力を合わせてそれを防ぐものであるということ。牆=垣根。家などの外側の仕切り。闢ぐ=争

い合う。

兄弟と言うのは面白いものだ。親がいると喧嘩ばかりするが、二人で留守番となると、心細いのか、肩を寄せ合って仲良くしている。まして、外部からの攻撃があれば、一致団結してこれに対抗する。普段仲が悪いように見えても、いざとなれば協力し合うという諺。兄弟喧嘩を嘆く保護者にこの諺を伝えている。喧嘩ばかりしているようでも、寝る時になるとくっついていたりとか、そんな話を引き出すことで、保護者もホッとするものだ。

また、兄弟喧嘩をすることで、喧嘩の仕方もある。口喧嘩、殴り合い、色々あるが、物を使わない、足は使わない等ルールのある喧嘩を経験することで、大きくなってからの喧嘩にも手加減が出来るようになるだろう。喧嘩も出来ないよりは、言いたいことを言って、もめるのも、そして仲直りすることも、良い経験になる。喧嘩も大事。

出典説明

### 易経・・・十二編

周代の占いの書。儒教の五経の一つ。経文とその解説書の「十翼」を合わせて十二編よりなる。陰と陽を組み合わせて八卦、これを重ねた六十四卦によって、自然と人間の変化の法則を説いた書で、中国の哲学思想のもとになった。作者として、周の文王、周公、孔

子があげられるが、確かではない。

### 論語・・・二十編

儒教の経典。『大学』『中庸』『孟子』と共に四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、孔子の死後に門人たちが編集したものとされる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知るうえで極めて重要な資料である。

### 列子・・・

中国、戦国時代の思想家。名は欒きん冠こう。老子よりあと、荘子より前の時代の道家といわれ、虚の道を得た哲人と伝えられるが不詳。『列子』八巻の著者とされるが異説も多い。

### 史記・・・百三十巻

中国時代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏・殷・周・秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

### 晋書・・・百三十巻

中国正史の一つ。唐の太宗の命により房玄齡らが編纂した。六四六年ごろに完成。西晋四代（二百六十五～三百十六年）と東晋十一代（三百十七～四百二十年）の歴史を、陸機など十八史家の晋史を参考に、「世説新語」などの説話集からも記事を引用して編集している。

### 蒙求・・・三巻

唐代の児童・初学者用の教科書。編者は李翰りかん。古代から南北朝までの有名な

人物の故事や言行五百六十九事項を、記憶しやすいように表題を四字句の韻語で表し、類似の事項二つを一組にしたもの。有名な故事が多く含まれており、中国古典を学ぶものの入門書として尊ばれている。日本には平安時代に伝えられ、愛読された。

### 世説新語・・・三卷

中国、六朝時代の逸話集。南朝宋の劉義慶の撰。後漢から東晋までの貴族や知識人の逸話を集め、徳行・言語・故事・文学など三十六門に分類して簡潔な文体で記したもの。六朝時代の貴族・知識人の風潮を知るのに便利であり、また、言語資料としても貴重である。現在伝わるものは、梁の劉孝標領叔書が注を加えたものである。